

Bolton, Richard. *The Contest of Meaning: Critical Histories of Photography*. MIT Press, 1989.

Crimp, Douglas “The Museum’s Old/ The Library’s New Subject” 3-12

• *Art of the Twenties* was all the more interesting and appropriate for the museum’s anniversary year because it came at the end of another decade in which painting and sculpture had been displaced by other aesthetic options. (3)

・ 実際は、本展示よりも、美術館の「空中権」（air rights）の売却に際しての、ブロックバスター展「ピカソ回顧」が大きな注目を集めた。もうひとつ、美術館における写真部門という世界初の部門の創立に関わったアンセル・アダムズの個展も特筆に値する。両者が同時期に開催されたことが重要である。

・ ピカソという形象は、鑑賞者たちに、マス・メディアだけでなく、ミュージアムによって期待されたほどの反応を受取りはしなかった。ピカソは、あらゆるイデオロギーから自由であることを軽やかに提示するが、美術史家のコミュニティにとってそうした理解は支持される一方で、デュシャンの「作家性を拒否した」作品が見落とされる現状について。

・ 絵画と写真、マイクとテイクの違いに注目。シャーカフスキーノーの表明の一方でアダムズはそれに異なる意見を示しているが、実際両者とも「*a medium of the artist’s subjectivity*」という写真の見方を強調する。こうしたモダニズム的意義づけとともに写真の複数性は排除され、写真は美術市場へと流れていく。

・ Julia van Haaten ニューヨーク公立図書館芸術・建築部門司書は、19世紀からの多くのヴィンテージ写真を保有していることに気づいた。展示をきっかけに、現在は同図書館写真収集部門のディレクターである。写真が入った本たちは異なる部門から異なる部門へ、異なる作者から異なる作者へとあたらしく移入され、価値づけされた。写真は、写真として、1960-70年代に再発見された。

・ こうした写真自体への意識が読めるシャーカフスキーノーのテキストには、グリーンバーグ的メディア特性を指摘できる。美学的な特性の強調は、写真の異なる利用の在り方を損なう、という批判。エジプトについての本からはがされ、壁に掛けられてしまった Francis Flith の写真は、同じようには見られない。

• This redistribution is associated with the name postmodernism, although most of the people who use the name have very little idea what, exactly, they’re naming or why they even need this new name. (8)

• Photography’s entrance into the museum on a vast scale, its revaluation according to the epistemology of modernism, its new status as an autonomous art—this is what I mean by the symptoms of modernism’s demise. (8)

・ *Art of the Twenties* では写真が自己表現であると示されたが、実際、MoMA が写真部門を早くに設立したのもそうした理念であり、両者がいかに自己回収的、自己生産的な美学に追っているかを示している。70年代の MoMA が写真をアートであると表明できるのは、20,

30年代のMoMAが写真をアートであると位置づけたからである。

- ・60年代の初めに、RauschenbergとWarholが写真を利用した時点で、写真のアート的利用が開始した、と指摘。
- ・当時Ruschaのガソリンスタンドの写真集をアートの棚に映したことがあったが、その考え方を今では改めている。